



TITLE:

朱子語類論文篇譯注(八)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 木津, 祐子; 齋藤, 希史

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 朱子語類論文篇譯注(八). 中國文學報 2001, 62: 75-96

ISSUE DATE:

2001-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177870>

RIGHT:

朱子語類論文篇譯注 (八)

興膳宏
京都國立博物館

木津祐子
京都大學

齋藤希史
國文學研究資料館

74 今江西學者有兩種、有臨川來者、則漸染得陸子靜之學。又一種自楊謝來者、又不好。子靜門猶有所謂「學」。不知窮年窮月做得那詩、要作何用。江西之詩、自山谷一變至楊廷秀、又再變、遂至於此。本朝楊大年雖巧、然巧之中猶有混成底意思、便巧得來不覺。及至歐公、早漸漸要說出來。然歐公詩自好、所以他喜梅聖俞詩、蓋枯淡中意思。歐公最喜一人送別詩兩句云：「曉日都門道、微涼草樹秋。」又喜王建詩、「曲徑通幽處、禪房花木深。」歐公自言平生要道此語不得。今人都不識這意思、只要嵌事、使難字、便云好。

朱子語類論文篇譯注 (八) (興膳・木津・齋藤)

難。

いまの江西の學者には二種類あつて、臨川(王安石)の流れを汲む者は、だんだん陸子靜の學問に染まつてしまつたが、もう一つ楊・謝の流れを汲む者があつて、これもよくない。子靜の門下にはそれでも「學」というものがある。年がら年中あんな詩を作つて、何になるのだ。江西の詩は、山谷から一變して楊廷秀となり、さらにまた一變してここまで來た。本朝の楊大年は巧みだが、巧みさの中に渾然とした趣きがあり、巧みさがそれと感ぜられない。歐公になると、もうだんだんことばにしようとしている。けれども歐公の詩はちゃんとしたので、彼が梅聖俞の詩を好んだのも、枯淡のなかに趣きを感じたからなのだ。歐公がもっとも好んだある人の「送別詩」の二句には、「曉日都門の道、微涼草樹の秋」という。また王建的詩の「曲徑通幽の處、禪房花木深し」も好んだ。歐公はふだんからこういう句を求めながら得られないと自分でいつている。いまの人はその意味がちつとも分からず、ただ典故を填めこみ、難しい字を使いさえすれば、それでよいとしている。

吳雉記す。

〔校勘〕朝鮮古寫本 漸染得陸子靜之學↓漸深得陸子靜之學猶有所謂學↓猶有所學 窮年窮月↓窮年窮日 猶有混成底意思↓猶見混成底意思 嵌字↓嵌事

朝鮮古活字本 嵌字↓嵌事

〔注〕「江西學者」については、論文篇上17條を参照。

〔臨川〕は、王安石。「楊謝」は、楊時と謝良佐。楊時は、將樂の人、字は中立、程顥および程頤に師事し、朱熹の學問も源は楊時に出づと云う。熙寧九年（一〇七六）の進士。諡は文靖、龜山先生と稱された。一〇五三—一一三五。著に『二程粹言』『龜山集』『龜山語錄』など。『宋史』卷四二八、『宋元學案』卷二五。謝良佐は、上蔡の人、字は顯道、程顥および程頤に師事し、楊時らとともに程門四先生と呼ばれた。元豐八年（一〇八五）の進士。諡は文肅、上蔡先生と稱された。著に『論語解』『上蔡語錄』など。『宋史』卷四二八、『宋元學案』卷二四。

〔陸子靜〕の學問についての朱子の見方は語類卷一二四「陸氏」にくわしい。

〔楊廷秀〕は、楊萬里。一一二四—一二〇六。廷秀は字。吉水の人。詩文にすぐれ、陸游と併稱される。諡は文節、誠齋先生と稱された。著に『誠齋易傳』『誠齋集』など。『宋史』卷四三三、『宋元學案』卷四四。

〔楊大年〕は、楊億。九七四—一〇二〇。大年は字。蒲城

の人。典章制度に通じ、王欽らと『冊府元龜』を編纂した。詩は李商隱を宗とし、西崑體として一世を風靡した。『宋史』卷三〇五。歐陽修『六一詩話』に「楊大年與錢・劉數公唱和自西崑集出、時人爭效之、詩體一變。而先生老輩患其多用故事、至於語僻難曉、殊不知自是學者之弊。」と云う。

〔混成〕は、31條参照。

〔枯淡〕は、歐陽修が梅堯臣を評した有名なことばに「聖俞平生苦於吟詠。以閑遠枯淡爲意。故其構思極艱」（『六一詩話』）とあるのが参照されよう。

〔曉日都門道……〕の句については、未詳。なお、韋應物『答劉西曹』（『韋蘇州集』卷五）に「公館夜云寂、微涼羣樹秋」と類句がある。

〔曲徑通幽處……〕の句は、王建ではなく常建「題破山寺後禪院」の句。『常建詩』卷三には「竹逕通一作通幽處、禪房花木深」に作る。またこの記事は歐陽修「題青州山齋」（『文忠集』卷七三）に「吾嘗喜誦常建詩云、「竹逕通幽處、禪房花木深。」欲效其語作一聯、久不可得、乃知造意者爲難工也。……」とあるのにもとづく。

75 先生因説、「古人做詩、不十分著題、却好。今人做詩、愈著題、愈不好。」或舉某人會做詩。曰、「他是某人外甥、他家都會做詩、自有文種。」又云、「某嘗謂氣類近、風土遠、

氣類才絶、便從風土去。且如北人居婺州、後來皆做出婺州文章、間有婺州鄉談在裏面者、如呂子約輩是也。」^一 燾。

先生がそこでいわれるには、「古人は詩を作るのに、あまり題に引つ張られなかつたが、そこがよい。いまの人が詩を作ると、題に引つ張られるほど、悪くなる。」ある人が誰それは詩がうまいというと、いわれるには、「彼は誰そのの外甥で、あの家はみな詩がうまい、文人の家系だね。」またいわれるには、「私はかつて仲間の影響は強く、風土の影響は弱いと思つていたが、仲間の影響が切れると、風土の方へ流れてしまう。たとえば北方人が婺州に住むと、のちにはみな婺州ふうの文章を書くようになって、婺州の方言を混えていることもある。呂子約などがそうだな。」呂燾記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「著題」は、切題と同じく、内容が題に沿っていること。『滄浪詩話』詩法に「不必太著題、不必多使事」。また『語類』にも「太公銘几杖之屬、有不可曉、不著題之語。古人文字只是有箇意思便說、不似今人區區就一物上說。」(『禮五 大戴禮』八八・2369)

朱子語類論文篇譯注(八)(興膳・木津・齋藤)

「氣類」は、『易』乾卦の「同聲相應、同氣相求。……則各從其類也。」にもとづく語。

「文種」は、讀書人の血筋。柳宗元『龍城錄』に「裴令公常訓其子、凡吾輩但可文種無絶、然其間有成功能致身於萬乘之相、則天也。」と云う。また、56條も參照。

「婺州」は、いまの浙江省金華縣を治とする州。

「呂子約」は、呂祖儉、金華の人、子約は字、呂祖謙の弟、?—一九六。著に『大愚集』。『宋史』卷四四五、『宋元學案』卷五一。呂祖謙の傳に「呂祖謙字伯恭、尙書右丞好問之孫也。自其祖始居婺州。祖謙之學本之家庭、有中原文獻之傳。」(『宋史』卷四三四)と云う。なお呂氏はもと萊州の人だが呂夷簡の祖龜祥が知壽州となつてのち壽州に居した。

76 或問、「倉頡作字、亦非細人。」曰、「此亦非自撰出、自是理如此。如「心」「性」等字、未有時、如何撰得。只是有此理、自流出。」可學。字附。

ある人が「倉頡は字を作りましたが、つまらぬ人ではなかつたでしょう」と尋ねると、いわれるには、「これも自分でこしらえたわけではなく、おのずとそうなる道理だつたということだ。「心」とか「性」などの字は、無いとき

に、どうやってこしらえられよう。この道理があるからこそ、おのずと出てくるのだ。」鄭可學記す。以下、字の部にについて。

(校勘) 朝鮮古寫本 卷一四〇「雜類」所收

(注) 「倉頡」は、文字を創造したとされる人物。蒼頡とも。

「黃帝之史倉頡、見鳥獸蹏迹之迹、知分理之可相別異也、初造書契。」(許慎「說文解字」敘)

「細人」は、つまらない人。「君子之愛人也以德、細人之愛人也以姑息。」(「禮記」檀弓下) 息

この問いは、韓愈「讀皇甫湜公安園池詩書其後」二首其一の、「爾雅注蟲魚、定非磊落人」を意識して發せられたものか。

77 大凡字、只聲形二者而已。如「楊」字、「木」是形、

「易」是聲、其餘多有只從聲者。按、六書中、形聲其一。營

字というものは、聲(音)と形の二つなのだ。「楊」と

いう字は、「木」が形で、「易」が聲で、その他には聲に従うだけのものも多い。按ずるに、六書のなかで「形聲」はその一つである。黄營記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「聲形」(「形聲」) および「六書」については、『說文』敘及びその段注に次のように記す。『說文解字』敘「周禮八歲入小學、保氏教國子、先以六書。一曰指事、指事者、視而可識、察而見意、上下是也。二曰象形、象形者、畫成其物、隨體詰詘、日月是也。三曰形聲、形聲者、以事爲名、取譬相成、江河是也。四曰會意、會意者、比類合誼、以見指撝、武信是也。五曰轉注、轉注者、建類一首、同意相受、考老是也。六曰假借、假借者、本無其字、依聲托事、令長是也。」

「形聲」は「周禮」では「諧聲」という。朱子が本條で示す形聲字への理解は、『說文』以來の考えを襲うオーソドックスなもので、唐の賈公彥が『周禮』地官「保氏」の疏に「諸聲者、卽形聲、一也。江河之類是也。皆以水爲形、以工・可爲聲」と云うのとも共通する。

78 凡字、如「楊」「柳」字、「木」是文、「易」「卯」是字。

如「江」「河」字、「水」是文、「工」「可」是字。字者、滋

也、謂滋添者是也。揚。

字というものは、「楊」や「柳」などの字だと、「木」が文で、「易」「卯」が字だ。「江」や「河」だと、「水」が文で、「工」「可」が字だ。字というのは「滋」ということで、つまり意味の増えた部分ということなのだ。包揚記す。

（校勘） 朝鮮古寫本 本條を缺く

（注） 「字」と「文」の定義は、『説文』敍に「倉頡之初作書、蓋依類象形、故謂之文。其後形聲相益、即謂之字。文者物象之本、字者言邇孳乳而寢多也」とある通り、象形や指事のように本源的に何かを象るまたは指し示して作られたものを「文」、「文」に何らかの要素を付加したものを「字」と捉える考え方が基本である。朱子がこの條で述べるように、部首つまり分類を示す意符を「文」ととらえ、聲符を「字」と捉える考え方はそれ程一般的とは言えないが、前條と併せて考えると、朱子は、所謂「意符」を形であり文であり、「聲符」を聲であり字であると見なしていたこととなる。「形」つまりものの形象を「文」と捉えること自體は、例えば『春秋左傳正義』宣公十五年の孔穎達疏に「文者、物象之本。字者、孳乳而生。是文謂之字也、制字之體」とあるのにも通じるものである。

79 因説叶韻、先生曰、「此謂有文有字。文是形、字是聲。

文如從「水」從「金」從「木」從「日」從「月」之類。字是「皮」「可」「工」「奚」之類。故鄭漁仲云、「文、眼學也、字、耳學也。」蓋以形聲別也。」時舉。

叶韻について説かれたおりに、先生がいわれるには、

朱子語類論文篇譯注（興膳・木津・齋藤）

「これは文と字とがあるということだ。文とは形、字とは聲だ。文は「水」に従う「金」に従う「木」に従う「日」に従う「月」に従うという類で、字とは「皮」「可」「工」「奚」の類だ。だから鄭漁仲は、「文は、眼で學び、字は、耳で學ぶ」といつている。つまり形と聲で區別されるのだ。」潘時舉記す。

（校勘） 朝鮮古寫本 本條を缺く

（注） 「鄭漁仲」は、鄭樵、一一〇四―一一六二、漁仲は字。博學強記、諸學に通じ、考證を善くした。溪西逸民と號し、また夾漈先生と稱される。著に『爾雅注』『通志』『溪西集』など。

鄭樵の説は、『六書略』第五「論字母」に「立類爲母、從類爲子。母主形、子主聲。説文眼學、眼見之、則成類。廣韻耳學、耳聽之、則成類、眼見之、則不成類」と見える。

80 「壹」「貳」「參」「肆」、皆是借同聲字。「柒」字本無

此字、唯有「漆沮」之「漆」、「漆」字草書頗似「柒」、遂誤以爲眞。洪氏隸釋辨不及此。闕祖。

「壹」「貳」「參」「肆」は、どれも同聲の字を借りたも

のだ。「柒」の字はもとそんな字はなく、「漆沮」の「漆」という字があったただだが、「漆」という字の草書が「柒」によく似ていたので、間違つて「柒」を正字にしてしまった。洪氏の『隸釋』はここまで分析していない。

李閔祖記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 壹・貳・參・肆→一・二・三・四 柒→七

朝鮮古活字本 壹・貳・參・肆→壹・貳・參・肆 皆→嘗 (注) 「漆沮」は、漆水と沮水、『詩』周頌「潛」の句、「猗漆沮、潛有多魚」の毛傳に「漆沮、岐周之三水也」と云う。

「洪氏隸釋」は、洪適の『隸釋』、その卷十二「李翊夫人碑」に「五三末兮」とある「末」に「末字」と注するが、『四庫總目提要』は、「……自有碑刻以來、推是書爲最精博、其有偶有遺漏者、……李翊夫人碑三五末兮襄左姬、據山海經剛山多漆木、水經注漆水下有柒縣、柒水柒渠字皆作柒、隸從柒省去水爲柒。洪以爲卽末字、亦非也。」と指摘する。朱子が言及するのもこの箇所についてであらう。

81 「世」字與「太字」、古多互用。如太子爲世子、太室爲世室之類。廣。

「世」の字と「太」の字は、昔からよく互用する。「太子」を「世子」としたり、「太室」を「世室」としたりする類だ。輔廣記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 世字與太字→世子與太子

(注) この條は卷六三「中庸」第十九章(1568)に採録される以下の條と重なる。「或問中說廟制處、所謂「高祖」者何也。」曰、「四世祖也。」「世」與「太」字、古多互用、如太子爲世子、太室爲世室之類。」

「太子」を「世子」とする例は、『春秋左氏傳』桓公九年に「冬、曹伯使其世子射姑來朝」、傳に「冬、曹太子來朝」、疏に「經作世字、傳皆爲大、然則古者世之與太字義通也」。また「太室」を「世室」とする例は、『春秋穀梁傳』文公十三年に「大室屋壞」(公羊傳大作世)、傳に「大室屋懷者、有懷道也、譏不修也、大室猶世室也。」

82 黃直卿云、「如傭僱之「傭」、也只訓「用」。以其我用他、故將雇以還其力。由此取義、此皆是兩通底字。」義剛。黃直卿がいうには、「傭僱」の「傭」などは、ただ「用」という意味だ。自分が人を「用」いるので、賃金を

「雇^は」つてその勞力に報いるということだ。ここから意味を取れば、これら「傭」「僱」はどちらも「用」「雇」に通用する字だ。」黃義剛記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 如傭僱↓如傭雇 兩通底字↓兩通字
朝鮮古活字本 如傭僱↓如傭雇

(注) 「黃直卿」は、黃榦、直卿は字、閩縣の人。一一五二—一二二一。朱子の弟子でありまた女婿。勉齋と號した。著に「書說」十卷、「六經講義」三十卷、「勉齋集」四十卷など。「傭」について、「說文」は「傭、均、直也」とし、「一切經音義」卷六は「蔡邕勸學注云、傭、賣力也。莊子、傭於人者。孟氏曰、傭役也。謂役力受直曰傭」と云う。

83 夷狄字、皆從禽獸旁。苗本有反犬。古人字通用、無亦得。義剛。

夷狄を表す字は、みな禽獸の部首に従う。「苗」の字はもとともけものへんがついていた。古人は字を通用させていたから、「けものへんは」無くてもよい。黃義剛記す

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「苗」は、「玉篇」卷十三「艸部」に「苗、靡驕切、田苗、又夏獵曰苗」、卷二十三「犬部」には「猫、眉驕切、

朱子語類論文篇譯注 (八) (興膳・木津・齋藤)

夏田也、食鼠也、或作猫。」

「反犬」は、けものへんのこと。

84 古人相形造字、自是動不得。如「轡」字、後面一箇「車」、兩邊從「糸」、即纏繩也、前面口字、即馬口也、馬口中銜著纏繩也。子蒙。

古人が物の形を見て作った字は、おのずと變えようがない。「轡」の字は、後ろに一つの「車」があり、兩側が「糸」に従うのは、つまり手綱で、前が「口」の字なのは、つまり馬の口、馬の口中に手綱を銜^{くは}えているのだ。林子蒙記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く
朝鮮古活字本 「糸」↓「系」

(注) 「轡」について、「說文」は「馬轡也、从絲从車、與連同意」とするが、段注では「轡、馬轡也、从絲車」と作った上で、「惟廣韻六至轡下云、說文作轡、此蓋陸法言、孫愐所見說文如此」と注する。

85 秦篆今皆無此本、而今只是摹本、自宋宮公已不見此本

了。義剛。

秦篆は今はどれも原本がなく、模本だけで、宋宮公からすでに原本は見られなくなっている。黄義剛記す。

(注) 「秦篆」については、『漢書』藝文志に「蒼頡七章者、秦丞相李斯所作也。爰歷六章者、車府令趙高所作也。博學七章者、太史令胡毋敬所作也。文字多取史籀篇、而篆體復頗異、所謂秦篆者也。」

宋宮公は、宋庠、字は公序、九九六一—一〇六六。開封雍丘の人。『新唐書』を編んだ弟の祁とともに「二宋として名高い。嘉祐五年（一〇六〇）に莒國公に封ぜられる。『金石錄』「秦泰山刻石」には「大中祥符歲、眞宗黃帝東封此山、兗州太守模本以獻凡四十餘字、其後、宋宮公模刻于石」と云う。

86 説文亦有誤解者、亦有解不行者。音是徐鉉作、許氏本無。必大。

『説文』には解が誤っているものもあれば、解が通じないものもある。音は徐鉉がつけたもので、許氏の本にはもともとなかった。吳必大記す

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く
朝鮮古活字本 音是徐鉉作↓詎是徐鉉作

(注) 『説文』に付されている反切は、大徐本序に「説文時未有反切、後人附益、互有異同、孫愐唐韻行之已久、今孫愐音切爲定」とあるとおり、孫愐「唐韻」の反切を採用している。ただし、『説文』に「音」が無いわけではなく、そこで用いられるのは、「讀若」という注音法である。朱子がいう「音」とはあくまで「反切」を指すことを注意したい。ちなみに、反切の起源については、古來様々に議論されているが、専門にこの問題を論じた例では、『顏氏家訓』音辭篇の「逮鄭玄注六經、高誘解呂覽・淮南、許慎造説文、劉熹製釋名、始有譬況假借以證音字耳。而古語與今殊別、其間輕重清濁、猶未可曉、加以內言外言、急言徐言、讀若之類、益使人疑。孫叔言（孫炎）創辭雅音義、是漢末人獨知反語、至於魏世、此事大行。高貴鄉公不解反語、以爲怪異」が早く、反切の創始者として後漢の孫炎を挙げ、唐の陸德明も『經典釋文』例言で同じ考えを記している。宋代には、『夢溪筆談』卷十五藝文二に「切韻之學、本出于西域、漢人訓字、止曰讀如某字、未用反切」、また、鄭樵『通志』「六書略」に「説文時未有反切」、同じく「七音略」に「華人苦不別音、如切韻之學、自漢以前、人皆不識、實自西域流入中土」と述べるなど、本條と同様、漢以前には反切は存在せず、その誕生は西域つまり梵學の流入と密接な關係があると見なす考えが生まれている。一方で、清の顧炎武は漢以前の合字を挙げて反切との關連を論じるなど（『音論』卷下）、中國文明圈内に早くその萌芽が

あつたとする。

87 玉篇偏傍多誤收者、如「者」「考」「老」是也。

『玉篇』のへんやつくりには誤つて收められたものが多く、「者」「考」「老」などがそれだ。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 玉篇↓玉篇 老↓孝

(注) 現存する原本『玉篇』殘卷には「老部」を缺くため『大廣益會玉篇』によれば、「者・考・老」の三字はすべて卷十一「老部」に收められる。一方、『說文解字』では、「者」は卷四上「白部」に、「考」「老」はともに卷八上「老部」に屬す。本條には、朱子の考える「正しい」歸屬は明らかにされないものの、「者」が『說文』で「白部」に收められることから推し量るに、「者」が「考老」と同部であることを問題としたか、あるいは「老」は「七部」、「考」は「𠂔部」に屬すべきと見なしていたものか。

88 韻書難理會。如昨日檢「抑」字、玉篇說文中檢「𠂔」

及「邑」附、皆不見。後來在集韻中尋出、乃云「反印也」、却在「印」部尋得。元來無「挑𠂔」、如此寫「𠂔」。義剛

朱子語類論文篇譯注(八)(興膳・木津・齋藤)

字書はやつかいだね。昨日「抑」の字を調べたのだが、『玉篇』や『說文』で「𠂔」部や「邑」部を調べても、どちらにも見えない。あとで『集韻』で「この字を」引いてみたら、「印」のうらがえし」と書いてあつて、「玉篇」や『說文』では「印」部で引けたのだ。もともと「この字に」で、へんはなく、「𠂔」のように書くのだね。黄義剛記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 反印也↓反印翻字、從省作反

(注) 「韻書」は、『玉篇』『說文』が含まれることからすれば、ここでは廣く字引類全體のことを指すであらう。

「抑」は、『集韻』入聲二十四職韻に「𠂔抑抑、說文、按也、从反印、或从手、隸作抑」、『說文解字』卷九上印部に「𠂔、按也、从反印、俗从手」、『玉篇』卷二十八印部に「𠂔、於直切、按也、亦作抑」とある。

89 字之反切、其字母同者、便可互用、如「戎・汝」是也。

「逝」字從「折」、故可與「害」字叶韻。必大。

字の反切で、その聲母が同じであれば、互用できる。

「戎」と「汝」のようなものがそれだ。「逝」字は「折」に従うから、「害」字と叶韻できるのだ。吳必大記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「字母」は、例えば「三十六字母」というように、通常は聲母のこと。ただしこの條の後半部では、字の構成要素のこととしても述べている。

「戎」「汝」は、「廣韻」では「戎」は「如融切」、「汝」は「人渚切」、また「人」は「如鄰切」で確かに反切上字は互用される。ただしこの條の後半部では、字の構成要素のことを述べているかに見え、その點で前半と後半は呼應しない。「逝」と「害」が韻を踏む例は、『詩』邶風「二子乘舟」に見られ、朱子『詩集傳』ではとくに叶韻を指示しないものの、朱子の叶韻が多く依據した吳棫『韻補』では「折」と「害」は同じ韻に收められる。朱子は「吳氏復疑『務』當作『蒙』、以叶『戎』字。某却疑古人訓『戎』爲汝、如『以佐戎辟』、『戎雖小子』、則『戎・女』音或通。後來讀常武詩有云、『南仲太祖、太師皇父、整我六師、以修我戎』、則與『汝』叶、明矣。」「(『詩』網領)卷八〇・(308)のように述べてもおり、そこで「戎・女」音或通」と單に可能性を示したに過ぎない考えを、本條では兩者の反切上字(即ち字母)が互用されることが押韻(叶韻)の要件となるという風に一步發展させていたと見なすこともできよう。一方、「逝」「害」は、

それぞれ去聲の十三祭韻・十四泰韻に屬し、同韻ではないまでも、このまま通押するのがそれほど難しい韻ではない。そもそもこの二字は、『詩經』を主たる材料として再構成される上古音では、共にㄣで收聲する入聲韻に屬したと考えられており(李方桂など)、それ故にㄣ入聲の「折」を聲符にもつことも可能となるのだが、本條で、朱子が「逝」と「折」の組み合わせを「害」に對比していることからすれば、さらに彼が「害」を聲符に持つ「割」や「轄」(この組み合わせでこの對比はパラレルとなる)などを念頭に置いていた可能性も浮かび上がる。

90 五方之民、言語不通、却有暗合處。蓋是風氣之中、有自然之理、便有自然之字、非人力所能安排、如「福」與「備」通。

「五方之民、言語通ぜず」というが、期せずして一致することもある。というのも、「それぞれの」風氣に、自ずからなる理があり、すると自ずからなる字があるわけで、これは人の力でどうこうできるものではない。「福」と「備」が通じるのがそれだ。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 同文が「禮四 小戴禮」王制（卷八七・235）に見え
る。

「五方之民、言語不通」は、「禮記」王制に「五方之民、
言語不通、嗜欲不同。達其志、通其欲、東方曰寄、南方曰象、
西方曰狄鞮、北方曰譯」とあるのに據る。

「福」と「備」が通じることとは、「禮記」祭統に「賢者之
祭也、必受其福。非世所謂福也、福者備也、備者百順之名也、
無所不順者、謂之備。」

91 洪州有一部洪韻。太平州亦有一部韻家文字。義剛

洪州に『洪韻』という書物がある。太平州でも韻の本が
出ている。黄義剛記す。

（校勘） 朝鮮古寫本 有部韻家文字↓有一部韻家文字

朝鮮古活字本 有部韻家文字↓有一部韻家文字

（注） 「洪州」は、今の江西省南昌。「太平州」は、今の江
蘇省蘇州。

「洪韻」が具體的に何を指すかは不明。但し、「韻鏡」張
麟之序に「余年二十、始得此學、字音往昔相傳類曰洪韻、釋
子之所傳也、有沙門神珙號知音韻、嘗著切韻圖、載玉篇卷末、
竊意足書作於此僧、世俗訛呼珙爲洪爾、然又無據。自是研究、
今五十歲、竟莫知原於誰、近得故樞密楊侯俠、淳熙所撰韻譜、
其自序云、竭來當塗、得歷陽所刊切韻心鑑、因以舊書、手加

朱子語類論文篇譯注（八）（興膳・木津・齋藤）

校定、刊之郡齋、徐而諦之、即所謂洪韻、特小有不同」とあ
るのを見ると、當該地域を中心に流布していた韻圖の類であ
ると思われる。因みに、この序に見られる神珙の「切韻圖」
とは、『玉篇』卷末に付される「四聲五音九弄反紐圖」のこ
とをいうと考えられるが、この神珙も現在では如何なる人物
であつたか特定しがたく、これを「洪韻」に結びつける張麟
之の考え自体には、にわかに賛同することはできない。なお、
同じく序文の中の「樞密楊侯俠、淳熙所撰韻譜」は『永樂大
典』に載録され、この楊俠が太平州府の知州となつているこ
とを考えると、朱子が本條で「太平州亦有一部韻家文字」と
いう「韻家文字」が、この「韻譜」を指す可能性もあろう。

92 二王書、某曉不得、看著只見俗了。今有箇人書得如此
好俗。法帖上王帖中亦有寫唐人文字底、亦有一釋名底、此
皆僞者。揚。

二王（王羲之・王獻之）の書は、私にはよくわからない。
見たところただ俗っぽいしか思えない。いまこんなふう
に俗っぽく書く人もいる。法帖（淳化閣帖）の王帖のなか
には、唐人の文章を書いたものもあるし、僧侶の名のもの
もあり、どれもにせものだ。包揚記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「法帖」については、『蘇軾文集』（中華書局）卷六九「辨法帖」に「今官本十卷法帖中、眞僞相雜至多。逸少部中有「出宿錢行」一帖、乃張說文。又有「不具釋智永白」者、亦在逸少部中、此最疎謬」と云う。

93 字説自不須辯。只看說文字類、便見王氏無意思。字類有六、會意居其一。方。

『字説』はとやかくいうほどのものではない。『説文』の字類を見るだけで、王氏は無意味と知れるよ。字類には六種類あり、會意がその一つ。楊方記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 字↓氏

〔注〕 『字説』は、王安石の撰した書。當初よりその荒唐無稽な説に對して批判が多かった。『郡齋讀書志』卷四小學類「字説二十卷、右皇朝王安石甫撰。蔡卞謂、介甫晚年間居金陵、以天地萬物之理、著於此書、與易相表裏、而元祐中言者、指其採雜釋老、穿鑿破碎聲聲。學者特禁絕之。」

『説文字類』は、注記を見るに、所謂「六書」を指すものと思われる。「六書」の定義は『説文解字』敘に見られる（77條注參照）。

94 字被蘇黃胡亂寫壞了。近見蔡君謨一帖、字字有法度、如端人正士、方是字。揚。

字は蘇（東坡）・黃（庭堅）によつてめちゃくちゃにされた。ちかごろ蔡君謨の一帖を見たが、一字一字に法度があり、折り目正しい人物のようで、これこそ字だ。包揚記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「蔡君謨」は蔡襄。君謨は字、仙遊の人。一〇二一—一〇六七。書に優れ、歐陽脩には「近年君謨獨步當世」（『文忠公集』卷一三〇「蘇子美蔡君謨書」）と稱された。著に『忠惠集』三十六卷など。『宋史』卷三二〇、『宋元學案』卷五。

「端人正士」は、きちんとした人物。「端人」は『孟子』離婁下に「夫尹公之他、端人也。其取友必端矣」、「正士」は『管子』桓公問に「人有非上之所過、謂之正士」のように古くからある語だが、宋代以降、「端人正士」のように連ねて用いることが多い。「東坡如此做人、到少間便都排廢了許多端人正士、却一齊引許多不律底人來。」（本朝四 自熙寧至靖康用人）一一〇・二一〇

95 論書、因及東坡少壯老字之異。南康有人有一卷如此。因說、「南軒喜字、然不甚能辨。因有一僞書東坡字、不好、南軒

以「端莊」顯之。因論麻衣易不難辨、南軒以快之故。嘗勸其改一文、曰、「改亦只如是、不解更好了。」揚。

書を論じて、東坡の若年・壯年・老年の字の違いに話が及んだ。(南康にそういう一巻の書をもっている人がいた。)そこでいわれるには、「南軒は字を好んだが、あまり目は利かなかった。(ついでにいわれるには、東坡筆とされる偽の書があり、つまらぬものだが、南軒はそれに「端莊」と題した。)さらに『麻衣易』は偽書だとすぐ分かるのに、南軒が褒めたわけを論じられた。『先生は』以前、彼の一文を改めるよう勧めたが、「改めてもこれでは、よくなるはずがない」といわれた。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 東坡題字→東坡字 顯之↓題之 嘗勸其改

一文↓嘗勸其改文(細字)

(注) 「南康」は、南康軍。いまの江西省星子縣を軍治としていたが、朱子は淳熙六年(一一七九)に知南康軍として着任(拜命は前年)、二年にわたって在職し、白鹿洞書院の復建を果たしたのもこの時である。

「南軒」は張栻、字は敬夫、または欽夫。廣漢の人。一一三三―一一八〇。南軒と號す。朱子と親交があり、ともに南

朱子語類論文篇譯注(八)(興膳・木津・齋藤)

岳衡山に登って議論したことは有名。『宋史』卷四二九、『宋元學案』卷五〇。著に『南軒易說』『南軒集』など。

「麻衣易」について、朱子は「麻衣易、南康戴主簿撰。麻衣、五代時人。五代時文字多繁絮。此易說、只是今人文字。南軒跋不曾辯得、其書甚謬。李壽翁甚喜之、開板於太平州。周子中又開板於舒州」(『易三綱領下』六七・168)、「麻衣易、南康戴主簿作。某親見其人、甚稱此易得之隱者、問之、不肯言其家。某適到其家、見有一冊雜錄、乃戴公自作、其言皆與麻衣易說大略相類。及戴主簿死、子弟將所作易圖來看、乃知眞戴公所作也」(同)と云う。ちなみに「戴主簿」は、戴師愈、字は孔文、星子の人、『宋元學案補遺』卷一〇。

96 子瞻單勾把筆、錢穆父見之、曰、「尙未能把筆邪。」方

子瞻が單鉤して筆を持つのを、錢穆父が見て、「まだ筆がちゃんと持てないのかね」といった。楊方記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「子瞻」は、蘇軾。

「單勾」は筆の持ち方。食指と大指のみを筆の軸にかけて書く。さらに中指を用いるのを雙鉤と呼ぶ。黃庭堅「跋東坡論筆」に「東坡平生喜用宣城諸葛家筆、以爲諸葛之下者猶勝它處工者。……然東坡不善雙鉤懸腕、故書家亦不伏此論」(『豫章黃先生文集』卷二九)と云う。

「錢穆父」は、錢鏐、穆父は字。錢塘の人。一〇三四―一〇九七。行草書を善くし、また藏書家でもあった。『宋史』卷三二七、『宋元學案』卷九六。

97 山谷不甚理會得字、故所論皆虛。米老理會得、故所論皆實。嘉祐前前輩如此厚重。胡安定於義理不分明、然是甚氣象。

山谷は字がよく扱えないから、「字を」論じてもすべて空論だ。米老（米芾）はちゃんと扱えるから、論じることすべて中身がある。嘉祐以前の人はあれほど厚重だった。胡安定は義理は分かっていたが、氣象は大したものだ。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く
（注）「米老」は、米芾、字は元章、襄陽の人、一〇五一―一〇七。書畫を善くして名高い。蘇軾・黃庭堅・蔡襄（もしくは蔡京）とともに宋代四筆と稱される。『宋史』卷四四四。

「胡安定」は、胡瑗、字は翼之、泰州海陵の人、九九三―一〇五九。安定先生と稱された。著に『周易口義』『資聖集』など。『宋史』卷四三三、『宋元學案』卷一。

98 魯直論字學、只好於印冊子上看。若看碑本、恐自未能如其所言。必大。

魯直が論じる字學は、せいぜい刊本で見たただけだ。もし碑本を見ていたら、自分でいっているようにはとてもできない。吳必大記す。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く
（注）「魯直」は、黃庭堅。

「碑本」は、碑文もしくはその拓本。「碑本後赤壁賦夢二道士、二字當作一字、疑筆誤也」（「本朝四 自熙寧至靖康用人」一三〇・315）、「舊東京關中漢唐宮闕街巷之類圖、今衢州有碑本。」（「雜類」一三八・383）

99 字法在黑內、黃魯直論得玄甚、然其字却且如此。揚。字法は、墨そのものの内にあるのだ。黃魯直はたいへん玄妙な論じ方をしているのに、その字ときたらこんなものだ。包揚記す。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く
朝鮮古活字本 黃魯直↓黃魯在

（注）底本の中華書局排印本は「字法、直黑内」とするが、その校勘に「直、陳本作「在」とあるのに據り、本文を改

めた。

100 筆力到、則字皆好。不曰有筆力。如胸中別様、即動容周旋中禮。方。

筆力が充實すれば、字はみなよくなる。筆力が有れば、とはいわない。心が一新すれば、立ち居振る舞いが禮になうのと同じだ。楊方記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「動容周旋中禮」は、『孟子』盡心下に「動容、周旋、中禮者、盛德之至也」とあるのにもとづく。

101 寫字不要好時、却好。文蔚。

よい字を書こうとしない時の方が、よいものになる。陳文蔚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

102 「南海諸番書、煞有好者、字畫遒勁、如古鍾鼎款識。

諸國各不同、風氣初開時、此等事到處皆有開其先者、不獨

朱子語類論文篇譯注 (八) (興膳・木津・齋藤)

中國也。」或問古今字畫多寡之異、曰、「古人篆籀筆畫雖多、然無一筆可減。今字如此簡約、然亦不可多添一筆。便是世變自然如此。」偶。

「南海の諸蠻の書には、とてもいいものがあり、字畫も力強く、古えの鍾鼎に刻まれた文字のようだ。諸國それぞれに違いがあり、土地の風氣が開化するとき、こうした事はどこでも創始者がいるもので、中國に限らないのだ。」ある人が古今の字畫の繁簡の違いについて尋ねると、いわれるには、「古人の篆籀は筆畫は多いが、一畫も減らせない。今の字はこのように簡略だが、一畫も増やせない。つまり世の變化がおのずとこうなるのだ。」沈僞記す。

(校勘) 底本の中華書局排印本は「古人篆籀筆畫雖多」を「古人篆刻筆畫雖多」に作るが、朝鮮古寫本・古活字本ともに「古人篆籀筆畫雖多」に作るのに従う。

(注) 「遒勁」は、力強いこと。張彥遠「法書要錄」卷四「唐朝敍書錄」に「褚遂良下筆遒勁、甚得王逸少之體」とあるように、書について用いられることが多い。

「篆籀」は、篆文と籀文、すなわち小篆と大篆。

103 「鄒德久楷書大學、今人寫得如此、亦是難得。只如黃魯直書自謂人所莫及、自今觀之、亦是有好處。但自家既是寫得如此好、何不教他方正。須要得恁欹斜則甚。又他也非不知端楷爲是、但自要如此寫、亦非不知做人誠實端慤爲是、但自要恁地放縱。」道夫問、「何謂書窮八法。」曰、「只一點一畫、皆有法度、人言『永』字體具八法。」行夫問、「張于湖字、何故人皆重之。」曰、「也是好、但是不把持、愛放縱。本朝如蔡忠惠以前、皆有典則。及至米元章黃魯直諸人出來、便不肯恁地。要之、這便是世態衰下、其爲人亦然。」道夫言、「尋常見魯直亦說好話、意謂他與少游諸人不同。」曰、「他也却說道理。但到做處、亦與少游不爭多。他一輩行皆是恁地。」道夫曰、「也是坡公做頭、故他們從而和之。」曰、「然。某昨日看他與李方叔一詩、說他起屋、有甚明窗淨几眼前景致、末梢又只歸做好吟詩上去。若是要只粗說、也且說讀書窮究古今成敗之類亦可、如何却專要吟詩便了。」道夫曰、「看他也是將這箇來做一箇緊要處。」曰、「他是將來做箇大事看了、如唐韓柳皆是恁地。」

鄒德久は楷書で『大學』を書いたが、今の人がここまで

書くとは、なかなか珍しいことだ。黄魯直の書などは自分では及ぶ者が無いといっているが、今から見ても、やはりよいところはある。しかし自分でこんなになんと書けるのなら、どうしてきちんとしようとしなかったのか。こんなに曲がりくねらなければ気が済まないということかね。彼だつてきちんとした楷書がよいと知らなかったわけではないが、自分ではこんなふうには書こうとしていた。人からは誠實謹直がよいと知らなかったわけではないが、自分では勝手氣儘にしたがつていた。「楊」道夫が、「書は八法に窮まるとういうことですか」と尋ねると、いわれるには、「二點一畫には、すべて規律があるということだ。」

「永」の字が八法を體現しているといわれるね。」「蔡」行夫が、「張于湖の字は、どうして誰もが重んじるのですか」と尋ねると、いわれるには、「よいにはよいが、押さえが利かず、奔放になりがちだ。本朝で蔡忠惠あたりからは、みな規律があつた。米元章や黄魯直らが出てきてから、そうしようとしなくなった。結局、世の風氣が衰えたわけ、人もしかり、だ。」道夫が、「ふだん魯直もよい事をいつて

いるのを見るにつけ、彼は少游たちとは違うように思うのですが」というと、いわれるには、「彼も道理をいうことはい。けれどもやるとなると、少游と大して變わりはない。彼らの世代はみなこんなふうだ。」道夫が、「やはり坡公が親玉で、それで彼らが足並みを揃えるのですね。」という、いわれるには、「そうだ。私は昨日、彼が李方叔に與えた詩を見たが、家を建てて、明窗淨几がどうの、眼前の風景がどうのといつて、最後はただ詩を詠じるによいというところに持つてゆく。もし何かいうならいって、讀書して古今の成敗を窮めるとでもいうならまだしも、どうして詩を詠じればそれでよしとなるのかね。」道夫が、「思うに彼はこれを大事なこととしていたんでしようね」というと、いわれるには、「彼はこれを大事なこととしたのだが、唐の韓柳だつてみなそうだったのだ。」

(校勘) 朝鮮古寫本 須要得↓須得 恁地放縱↓恁地放 但不把持↓但是他不把持 尋嘗↓尋常 說好話↓好說話 也是坡公↓也自是坡公

朝鮮古活字本 他們↓他門

(注) 「鄒德久」は、鄒柄、字は德久、晉陵の人、鄒浩(一

朱子語類論文篇譯注(八)(興膳・木津・齋藤)

〇六〇(一一一一)の子。『宋元學案』卷三五。なお底本は「鄒德父」に作るが、これは「久」の俗字を「父」と見誤ったもの。

「只如黃魯直」は、底本の中華書局排印本は「只是黃魯直」に作るが、朝鮮古寫本・古活字本がともに「只如黃魯直」に作るのに據つて改めた。

「欽斜」は、ななめになっていること、ゆがんでいること。

「張于湖」は、張孝祥、字は安國、歷陽烏江の人、于湖は號、一一三二—一一七〇。文章にたくみで、また書にも優れた。著に「于湖居士集」四十卷など。『宋史』卷三八九、『宋元學案』卷四一。

「八法」は、いわゆる「永字八法」。「永」の字の筆順に従つて、「側」「勒」「努」「趯」「策」「掠」「啄」「磔」の八法を云う。宋・陳思「書苑菁華」に「翰林禁經曰、八法起於隸字之始、自崔(瑗)・張(芝)・鍾(繇)・王(羲之)傳授所用、該於萬字墨道之最、不可不明也。隋僧智永發其指趣、授於虞祕監世南、自茲傳授遂廣彰焉。李陽冰云、昔逸少工書多載、十五年偏攻永字、以其備八法之勢、能通一切之字也。八法者、永字八畫是也矣」とある。

「把持」は、しっかり保つこと。「人若要洗刷舊習都淨了。却去理會此道理者、無是理。只是收放心、把持在這裏、便須有箇真心發見、從此便去窮理。」(『學六 持守』一一・222)

「蔡忠惠」は、蔡襄。

「少游」は、秦觀。

「坡公」は、蘇軾。

「他與李方叔一詩」は、未詳。なお「李方叔」は、李薦、方叔は字、號は齊南、一〇五九—一〇九。蘇軾と親しく、交わした詩また書翰も多い。『宋史』卷四四四、「宋元學案」卷九九。

「明窗淨几」は、明るい窓邊の清潔な書机、つまり理想の書齋。歐陽脩『試筆』學書爲樂に「蘇子美嘗言、明窗淨几、筆硯紙墨、皆極精良、亦自是人生一樂、然能得此樂者甚稀、其不爲外物移其好者、又時稀也」と云う。

「韓柳」は韓愈と柳宗元。

道夫云、「嘗愛歐公詩云、『至哉天下樂、終日在書案。』這般意思甚好。」曰、「他也是說要讀書。只歐公却於文章似說不做亦無緊要。如送徐無黨序所謂『無異草木榮華之飄風、鳥獸好音之過耳』、皆是這意思。」道夫曰、「前輩皆有一病。如歐公又却疑繫辭非孔子作。」曰、「這也是他一時所見。如繫辭文言若是孔子做、如何又却有『子曰』字。某嘗疑此等處、如五峰刻通書相似、去了本來所有篇名、却於每篇之首加一『周子曰』字。通書去了篇名、有篇內無本篇字、如

『理性命』章者、煞不可理會。蓋『厥彰厥微、匪靈弗登』、是說理。『剛善剛惡、柔亦如之、中焉止矣』、是說性、自以下却說命。章內全無此三字、及所加『周子曰』三字又却是本所無者。次第易繫文言亦是門人弟子所勦入爾。」道夫問、「五峰於通書何故輒以己意加損。」曰、「他病痛多、又寄居湖湘間、士人希疏。兼他自立得門庭又高、人既未必信他、被他門庭高、人亦一向不來。來到他處箇、又是不如他底、不能問難、故絕無人與之講究、故有許多事。」道夫曰、「如他說『孟子道性善』、似乎好奇、全不平帖。」曰、「他不是好奇、只是看不破、須著如此說、又如疑孟辨別自做出一樣文字。溫公疑得固自不是、但他箇更無理會。某嘗謂、今只將前輩與聖賢說話來看、便見自家不及他處。今孟子說得平易如此、溫公所疑又見明白、自家却說得恁地聾牙、如何辨得他倒。」道夫曰、「如此則是他只見那一邊、不知有這一邊了。」曰、「他都不知了。只如楊氏爲我、只知爲我、都不知聖賢以天地萬物爲一體、公其心而無所私底意思了。又如老氏之虛無清淨、他只知箇虛無清淨。今人多言釋氏本自見得這箇分明、只是見人如何、遂又別爲一說。某謂豈有此

理。只認自家說他不知、便得。」先生以手指其下月曰、「他若知之、則白處便須還是白、黑處便須還是黑、豈有知之而不言者。此孟子所謂『諛辭知其所蔽、淫辭知其所陷、邪辭知其所離、遁辭知其所窮』。辭之不平、便是他蔽了、蔽了便陷、陷了便離、離了便窮。且如五峰疑孟辨忽出甚『感物而動者、衆人也。感物而節者、賢人也。感物而通者、聖人也』。劈頭便罵了箇動。他之意、是聖人之心雖感物、只靜在這裏、感物而動便不好。中間胡廣仲只管支離蔓衍說將去、更說不回。某一日讀文定春秋、有『何況聖人之心感物而動』一語。某執以問之曰、『若以爲感物而動是不好底心、則文定當時何故有此說。』廣仲遂語塞。」先生復笑而言曰、「蓋他只管守著五峰之說不肯放、某却又討得箇大似五峰者與他說、只是以他家人自與之辨極好。道理只是見不破、後便有許多病痛。」道夫。

道夫が、「歐公の詩に「至れるかな 天下の楽しみ。終日 書案に在り」というのを愛誦しているのですが、こうした心ばえはたいへんよいものですね」というと、いわれるには、「彼もまた讀書せねばならないといっている。た

だ歐公は文章については作らなくともかまわないといっているようだね。『徐無黨を送る序』に「『その文は』草木榮華の風に飄えり、鳥獸好音の耳を過ぎるに異なる無し」というのも、みなこうした心ばえだ。」道夫が、「前代の人は誰も何かしらおかしなところがありますね。例えば歐公は『繫辭傳』が孔子の作ではないと疑っていました。」という、いわれるには、「これも彼の時代の考えなのだ。『繫辭傳』『文言傳』がもし孔子の作ったものなら、どうして『子曰』の文字があるのか「といっている」。私はこうしたところは、ちょうど五峰が『通書』を刻したときに、もとの篇名をすべて取り拂って、各篇のはじめに「周子曰」の文字を加えたのと同じではないかと考えた。『通書』が篇名を取り拂ってしまうと、一篇の中にはその篇の名が見えないから、「理性命」章などは、まったく手がかりがなくなってしまう。というのも、「厥れ彰かにして厥れ微か、靈に匪ず瑩に弗ず」は、理を説いていて、「剛善剛惡、柔亦た之くの如し、中焉にして止む矣」は、性を説き、それ以降は命を説いているのだ。章の中にはこの三字（理性命）

がなく、加えられた「周子曰」はもともとなかったものだ。そうしてみると、『易』の『繫辭傳』も『文言傳』も門人弟子が「子曰」を「勝手に書き加えたのだらう。」道夫が「五峰は『通書』にどうして勝手に自分の了見で添削を加えたのでしょうか」と尋ねると、いわれるには、「彼にはおかしなところが實に多いし、湖湘のあたりにいて、周りに士人が少なかった。そのうえお高く構えていて、人も彼に信服していたわけではない上に、敷居を高くされているので、誰もずっとやってこなかった。来る連中はというと、彼より程度が低くて、議論もできず、だから一緒に研鑽する者もおらず、それで問題が多いのだ。」道夫が、「彼が『孟子は性善を道う』について説くところは、奇をてらっているみたいで、ちつとも穩當じゃありません」というと、いわれるには、「彼は奇をてらっているのじゃなくて、見抜けていないから、そういうしかないのだ。そして「疑孟辨」のように別に同じような文章をひねりだす。溫公が「孟子を」疑ったのはもちろん間違いだが、かれはもつと手に負えん。私はつねづね思うのだが、先人や聖賢の話を

讀みさえすれば、自分がかれらに及ばないところがすぐわかるものだ。いま孟子がこんなに分かりやすく説いていて、溫公(司馬光)の疑問點もまたはつきりしているのに、自分がこんな小難しく説いてしまったら、どうやって彼を論破できよう。」道夫が、「ということは、彼は一方だけを見て、もう一方があるのを知らなかったということですね」というと、いわれるには、「かれはどっちも知らんのだ。楊氏の「爲我」についても、「爲我」ということだけ知っていて、聖賢が天地萬物を一體として、その心を公にして私するところなどないという意味だなんてまったく知らないのだよ。また老子の「虚無清淨」にしても、ただ「虚無清淨」ということを知っているだけだ。今の人で、釋氏はこうしたことはもともとはつきり分かっていたが、ただ人がどういっているかを見て、別に説を立てたのだという者が多いが、そんなばかなことはあるまい。ただ自分是他のことは知らないと思えさえすれば、それでよいのに。」先生が手で庭の月影を指していわれるには、「彼がもし知っていたのなら、白いところは白でしかなく、黒いところは

黒でしかない。知っているのにいわない者はあるまいさ。これこそ孟子の「諛辭は其の蔽る所を知り、淫辭は其の陷る所を知り、邪辭は其の離る所を知り、遁辭は其の窮する所を知る」というものだ。辭が偏っていると、他が見えなくなり、見えなくなると落とし穴にはまり、落とし穴にはまれば正道から外れ、正道から外れると、ゆきづまつてしまう。五峰の『疑孟辨』はいきなり「物に感じて動く者は、衆人なり。物に感じて節ある者は、賢人なり。物に感じて通ずる者は、聖人なり」などという。冒頭から「動」を罵っているわけだが、彼の考えでは、聖人の心は物に感じて、そこでそのまま平靜をたもつもので、物に感じて動くのはよくないというのだな。ちかごろでは胡廣仲がひたすらくどくどいい立てるばかりで、まるでおさまりがつかない。私がある日文定の『春秋』を讀んでいたら、「何ぞ況んや聖人の心の物に感じて動くをや」の句があった。私がそれを取り上げて、「もし物に感じて動くのがよくない心だというなら、文定に當時どうしてこんな説があるのかね」と尋ねたら、廣仲は言葉に詰まりおった。」先生は

また笑っていわれるのに、「つまり彼はひたすら五峰の説を守って放そうとしないのだ。私は五峰によく似た説を見つけて、彼にいつてやったのだが、それは彼らの仲間うちなら議論のつじつまがよく合うと思ったまでさ。道理が見抜けないばかりに、おかしいところばかりになる。」楊道夫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 五峰↓五峯 希疏↓希疎 人亦一向不來↓人亦一向不采 來到他處箇↓來到他處一个 (箇はすべて个) 須著↓須着 無↓(すべて) 无 忽出甚↓忽說出甚 先生以手指其下月曰↓先生以手指庭下月曰 是聖人之心雖感物↓是說聖人之心雖感物 有何□(空格) 聖人之心感物而動 蓋他只管守著五峰之說↓蓋他只管守著五峯之說

朝鮮古活字本 希疏↓希疎 須著↓須着 一邊了↓一邊曰↓子曰 忽出甚↓忽說出甚 先生以手指其下月曰↓先生以手指庭下月曰 是聖人之心雖感物↓是說聖人之心雖感物 蓋他只管守著五峰之說↓蓋他只管守著五峯之說

(注) 「至哉天下樂、終日在書案」は、歐陽脩「讀書」詩(『歐陽文忠公集』卷九、『宋文鑑』卷一五)の句。「吾生本寒儒、老尚把書卷。眼力雖已疲、心意殊未倦。正經首唐虞、僞說起秦漢。篇章異句讀、解詁及箋傳。是非自相攻、去取在

勇斷。初如兩軍交、乘勝方酣戰。當其旗鼓催、不覺人馬汗。至哉天下樂、終日在几一作書案。……」

「送徐無黨南歸序」は、「送徐無黨南歸序」(歐陽文忠公集)卷四三、『宋文鑑』卷八六)。「……豫讀班固藝文志唐四庫書目、見其所列自三代秦漢以來、著書之士多者至百餘篇、少者猶三四十篇、其人不可勝數、而散亡磨滅百不一二存焉。豫竊悲其人文章麗矣、言語工矣。無異草木榮華之飄風、鳥獸好音之過耳也。方其用心與力之勞、亦何異衆人之汲汲營營、而忽焉以死者。……」

「歐公又却疑繫辭非孔子作」については、歐陽脩の「易或問」(『文忠公集』卷一八)「傳易圖序」(同卷六五)「易童子問」(同卷七八)を參照。たとえば「易或問」三首の二には「或問、繫辭果非聖人之作、前世之大儒君子不論、何也。曰、何止乎繫辭、……或者曰、然則何以知非聖人之作也。曰、……何謂子曰者、講師之言也。……」と云う。

「這也是他一時所見」は、彼のその時の考え、とも譯しうるが、北宋の學術においては歐陽脩に限らず疑古の風潮があったことを踏まえ、彼の時代の考え、と譯出した。

「五峰」は、胡宏、字は仁仲、五峰は號、一一〇六―一一六二、崇安の人。胡安國の末子。著に「知言」「五峰集」など。『宋史』卷四三五、『宋元學案』卷四二。なお胡安國以下の胡氏の學についての朱子の評價は、『語類』卷一〇一「程子門人 胡康侯」に纏められている。

「通書」は、周敦頤撰、原名『易通』。『太極圖說』とともに、宋明理學の基本書。胡宏の刊行した『通書』について朱子は、「……而長沙通書、因胡氏所傳、篇章非復本次、又削去分章之目、而別以周子曰者加之。於書之大義、雖若無所害、然要非先生之舊、亦有去其目而遂不可曉者如理性命章之類。……」(周子太極通書後序)、『文集』卷七五)と云う。

「疑孟辨」は、司馬光の「疑孟」(『溫國文正公文集』卷七三)を駁して書かれた「釋疑孟」(『五峰集』卷五)を指す。

「此孟子所謂……」は、『孟子』公孫丑上の言葉。

「感物而動者……」は、「釋疑孟」では、「知天性感物而通者、聖人也。察天性感物而節者、君子也。昧天性感物而動者、凡愚也」とする。

「胡廣仲」は、胡實、廣仲は字、一一三六―一一七三、崇安の人。胡宏の從弟。『宋元學案』卷四二。

「文定」は、胡安國。

「後便有許多病痛」は、底本は「彼便有許多病痛」とするが、朝鮮古寫本および古活字本がともに「後便有許多病痛」と作るのに據って改めた。

「後記」 本稿作成の過程で、森田浩一、大野圭介、湯淺陽子、田口一郎、多田伊織、福田知可志諸氏のレジュメを參照した。記して謝意を表す。